

Clematis 属植物とその関連生薬の研究（第7報）¹⁾
「威靈仙」の本草学的考察（2）²⁾

御影雅幸，難波恒雄*
富山医科薬科大学和漢薬研究所

Pharmacognostical Studies on the *Clematis* Plants and Related Crude Drugs (VII)¹⁾
Herbological Studies on "Wei-ling-xian" (2)²⁾

MASAYUKI MIKAGE and TSUNEO NAMBA*

Research Institute for Wakan-yaku, Toyama Medical and Pharmaceutical
University, 2630, Sugitani, Toyama

(Received March 28, 1983)

As described in the previous paper, the first botanical origin of the Chinese crude drug "Wei-lingxian" was the *Clematis* plant of Ranunculaceae, especially the species in Sect. *Tessen*. But the botanical origin had changed with the times.

In this paper, the change of the botanical origin of "Wei-lingxian" was clarified herbologically.

As the result, the botanical origin of "Wei-lingxian" had changed from the species in Sect. *Tessen* to *Clematis terniflora* DC. in the Southern Song (南宋) dynasty of China. Furthermore, in the same dynasty, "Wei-lingxian" derived from the species in other families, i.e. Compositae, Umbelliferae, etc. had appeared. In the Qing (清) dynasty, the root of *Smilax* species of Liliaceae started to be used also as "Wei-lingxian."

Keywords—Wei-lingxian; *Clematis*; herbological study; botanical origin; Chinese crude drug

前報¹⁾で述べたごとく、「威靈仙」の古来の正品はキンポウゲ科の *Clematis* 属植物、とくにテッセン節の植物であったと考えられる。しかし、宋代の『図經本草』³⁾には明らかにゴマノハグサ科の *Veronicastrum sibiricum* (L.) PENNELL クガイソウと思われる文章と図が記され、さらに時代が下るにつれてユリ科植物、センリョウ科植物、キク科植物などを基源とする「威靈仙」が使用されるようになったようである⁴⁾。本報では「威靈仙」の基源植物の歴史的変遷について本草学的考察を加える。

I. 宋代初期までの「威靈仙」

前報¹⁾で述べたごとく、「威靈仙」は元来朝鮮半島で用いられていた薬物であり、*Clematis patens* MORR. et DECNE. カザグルマの根を基源とするものであったと考えられる。これが中国へもたらされたのは3世紀の頃であり、伝達の地である商州（今の陝西省東南部）にはカザグルマの分布がなかったので、おそらく同節 (Sect. *Tessen*) 中の *C. florida* THUNB. テッセン, *C. courtoisii* HAND.-MAZZ. および *C. cadmia* BUCH.-HAM. ex WALL. の3種の中のいずれかを代用としていたものと考えられる¹⁾。『開宝本草』³⁾の記文は明らかに *Clematis* 属植物を記したものと思えることから¹⁾、威靈仙が中国へもたらされて以後、少くとも宋代初期、すなわち10世紀の後半迄は *Clematis* 属のテッセン節植物基源の威靈仙が使用されていたと想定しうる。

II. 宋代における「威靈仙」

前述のように宋代初期までは *Clematis* 属のテッセン節植物基源の威靈仙が使用されていたが、このものは資源的に乏しいものであったと思われる⁵⁾。一方、『太平聖惠方』⁶⁾に約50処方、その120年後の『聖濟總錄』⁷⁾には100処方を越える威靈仙配合処方が収載されていることからわかるように、宋代になって威靈仙の需要が急増し、資源不足が深刻になり、『楓窓小牘』⁸⁾に「威靈仙難得真物」と記されているごとく、正品であるテッセン節植物基源の威靈仙の入手は困難になったようである（ただし後述のごとく、本書に記された真物の威靈仙もテッセン節植物基源ではない）。

このような背景から、宋代初期あるいは中頃から威靈仙の代用品が各地に出現し始めたものと考えられ、山西省のクガイソウもその中の1種であった¹⁾。また『楓窓小牘』⁸⁾には「俗医所用、多藁本之細者爾」と記され、宋代のある時期にはセリ科植物 (*Ligusticum sinense* OLIV.^{?9)} の地下部が広く威靈仙として使用されていたようでもある。しかし、その後の本草書にはセリ科植物基源の威靈仙を想起させる記文はなく、また現在市場にも見られないことから、このものが実際に使用されていたとしても一過性のものであったと考えられる。さらに同書には眞物の威靈仙として「其驗，以味極苦而紫黑，如胡黃連狀，且脆而不韌，折之有細塵起，向明示之，斷處有黑白暈，俗謂有鶴鵠眼，此數者備，然後為真」とあるが、この記載内容はテッセン節植物には合致しない。「色紫黑如胡黃連狀」の一文からは *Clematis* 屬植物では *Flammula* 節、*Rectae* 亜節、*Uncinatae* 列の植物¹⁰⁾ に類似しているようだが、「味極苦…脆而不韌」に一致しない。この記載に該当する植物は見出し難いが、「味が極めて苦い」という一文から、キク科植物基源の威靈仙がこの頃から使用されていたとも考えられる。

一方、威靈仙の需要が増えるに従い、『楓窓小牘』⁸⁾にも記されているように正品であるテッセン節基源の威靈仙は益々得難くなっていた。そこで当時テッセン節植物の主たる産地であった江州や湖州³⁾にても、資源不足から代用品が採集されるようになり、次第にテッセン節から他の *Clematis* 屬植物へ基源植物が転換していったと推察できる。江州および湖州近辺に分布する *Clematis* 屬植物で、根の形状がテッセン節植物に類似しているものは、*C. terniflora* DC. (= *C. paniculata* THUNB.)、*C. chinensis* OSBECK. などであり¹¹⁾、おそらくこれらが代用に供されたであろう。ただしこれらの植物、とくに *C. terniflora* では根は生時黒かっ色、乾燥するとさらに黒味を増し¹²⁾、テッセン節植物の根が淡かっ色～黒かっ色である^{11b)}のとは明らかに異なっている。ところで、当時盛んに行われていた金・元の漢方理論の中に「五宜」があって、腎經に入る薬物の色は黒色であるとしている¹³⁾。威靈仙は五臟を通じさず薬物であるが¹⁴⁾、主たる効能の1つである利水作用は腎經に入るものであり、『太平惠民和剤局方』¹⁴⁾でも威靈仙が主薬となっている処方は「治腎經不足」とされている。「五宜」の考え方に基づくなら、威靈仙としては淡色系のテッセン節植物よりも黒色となる *C. terniflora* の根の方がすぐれていることになる。このような理由もあって、威靈仙の基源植物はテッセン節から資源的にも豊富な *C. terniflora* へと変化していったものと考察しうる。『湯液本草』¹³⁾に「鐵脚者佳」と記されているものは本種のことと思われ、明代になって李時珍が『本草綱目』¹⁵⁾の集解で「一根叢鬚数百條長者二尺許初時黃黑色乾則深黑俗稱鐵脚威靈仙」と述べている形態はまさにこのものである。「鐵脚」の字を冠して従来の淡色系のものと区別したのである。「鐵」は黒色の意であり¹⁶⁾、「脚」は根のことを意味したのであるが、あるいは脚疾を治す意かも知れない¹⁷⁾。以上のことから、南宋になるとテッセン節植物基源の威靈仙はほとんど使用されなくなったものと考察しうる。

III. 明代の「威靈仙」

『救荒本草』¹⁸⁾に記された威靈仙はその附図にみられる花序や葉の形状からキク科の *Eupatorium* 屬植物基源と思われ¹⁹⁾、『救荒本草』を引用した『野菜博録』²⁰⁾には『救荒本草』の記載にさらに「味苦」を追加していることからもキク科植物と考えられる。*Eupatorium* 屬以外にキク科植物基源の威靈仙として、雲南省の現市場に *Inula* 屬、*Ainsliaea* 屬植物基源のものがあるとされるが⁴⁾、これらキク科植物基源の威靈仙は薬効的には期待できず、とくに *Eupatorium* 屬のものは単なる救荒野菜であったとも考えられる。キク科植物が威靈仙として使用され始めた理由は、おそらく『図經本草』中の「亦有似菊花頭者」の一文によるものと考えられるが、*Eupatorium* 屬植物の中には *E. lindleyanum* DC.、*E. heterophyllum* DC. など²²⁾のように葉が輪生状を呈する種があり、『図經本草』の「葉似柳葉作層六七葉如車輪有六層至七層者」に類似していることにも起因しているものと思われる。前報¹⁾で述べたように、後者はクガイソウを表現したものである。ただ『救荒本草』に記された威靈仙の産地「密縣（今の河南省開封県）²³⁾は汴京に隣接する地であり、『楓窓小牘』⁸⁾に「味極苦」と記されたものは、あるいはこの *Eupatorium* 屬植物であったのかも知れない。さらに *E. fortunei* TURCZ. フジバカマの全草は「蘭草」として漢方で古くから薬用とされ、主たる効能は湿を化し、暑を解するもので、しばしばリウマチにも応用されるところから⁹⁾、類似の効能を期待して代用に供されたとも考えうる。いずれにせよ一時的かつ地方的なものであったようである。

一方、*Clematis* 屬植物基源の威靈仙は、明代になる頃にはほとんどが根の黒色系のものに変わっており、先にも述べたように李時珍¹⁵⁾はとくに根の色が黒色であることを強調し、「別有数種根須一様但色或黃或白皆不可用」と記していることから、李時珍の時代にはテッセン節植物基源のものはほとんど使用されていなかったようだ。『本草原始』²⁴⁾や『本草彙言』²⁵⁾に画かれた威靈仙の図 (Fig. 1) は、蘆頭や根の形状から *Clematis* 屬植物基源と思われ、さらに蘆頭が太い点からテッセン節植物よりは *C. terniflora* に類似するものである。『本草綱目』の附図は李時珍の子息や孫達が描いたものといわれているが²⁶⁾、他の附図と同様、威靈仙についても現物を見ることなく描かれたもので

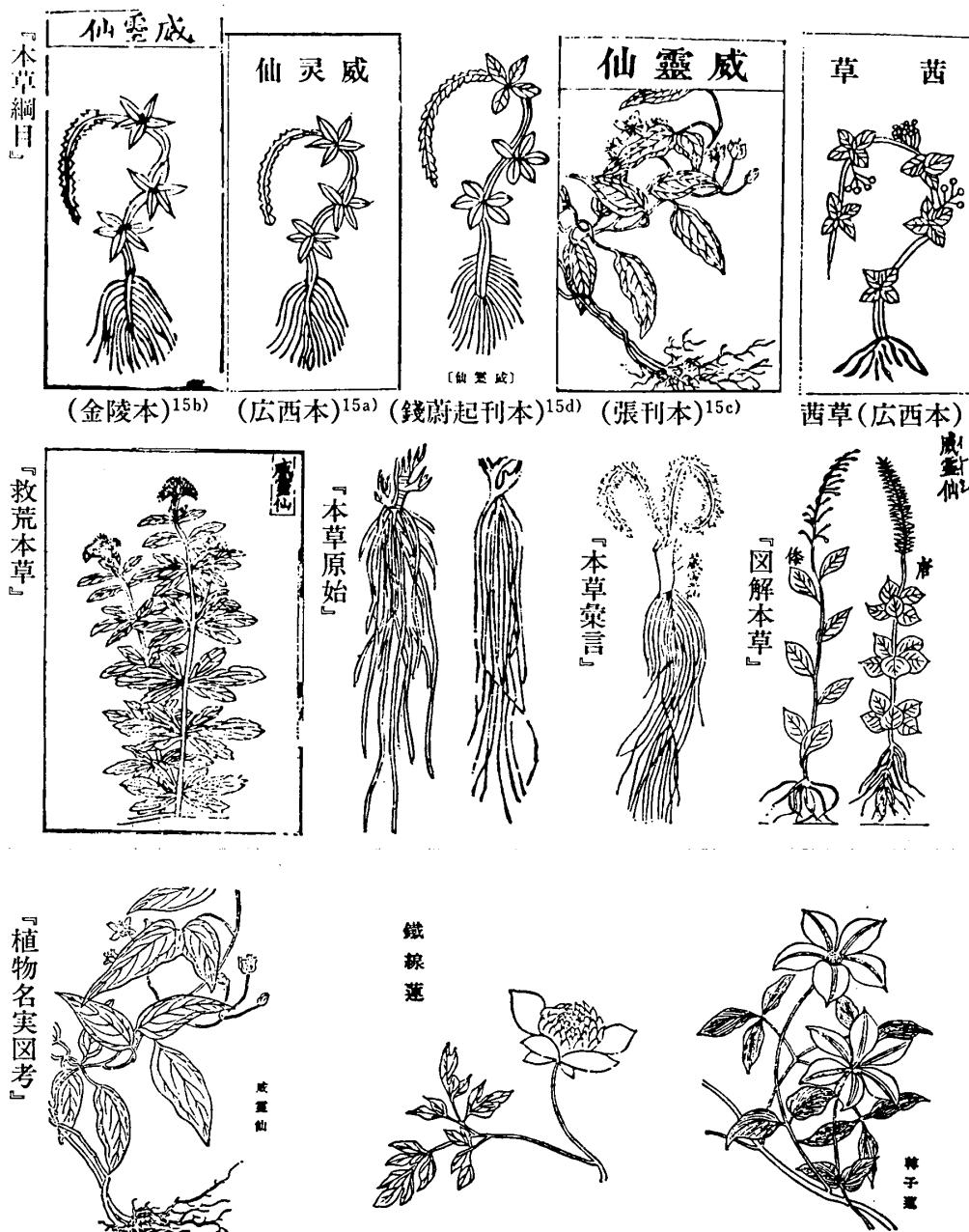


Fig. 1. 明代以後の本草書にみられる「威靈仙」および関連植物の図

あろう。そのもとになった植物は、その形状から明らかに『図經本草』に描かれたものである。李時珍が威靈仙を蔓草類に分類したことから、画家はその茎を蔓状に曲げ、さらに『開寶本草』³⁾の「茎方」の記文に合わせるために、茎の中央に縦線を入れたものと思われる。この表現方法は「茜草」(アカネ科の *Rubia* 属植物)の附図 (Fig. 1) に相似することからも裏付けられる。なお武林錢蔚起刊本の附図^{15d)}も同様であり、合肥張紹棠刊本の附図^{15c)}は『植物名実圖考』²⁷⁾の模写である (Fig. 1)。

以上のごとく、明代には主として *C. terniflora* 基源の威靈仙が用いられていたが、李時珍¹⁵⁾が、「別有數種根鬚一様但色或黃或白」と記しているごとく、*C. terniflora* 基源のもの以外にも多種の威靈仙が使用されていたようで、この中にテッセン節植物が含まれていたことも当然考えられる。また *C. terniflora* と地上部の形態が酷似し、根の外面が黄かっ色～灰かっ色を呈する *C. chinensis*²⁸⁾ が同時に使用されていたことも十分考えられる。さらに先述のセリ科やキク科植物の他、謝⁴⁾が報告しているセンリョウ科植物基源の威靈仙もこのころからすでに使用されていたのかも知れない。しかし明代の本草書の中にはユリ科の *Smilax* 属植物を想起させるような記載はなく、明代には *Smilax* 属植物基源の威靈仙はいまだ使用されていなかったと考える。また近年校訂出版された『滇南本草』²⁹⁾には威靈仙としてキク科の *Inula nervosa* WALL. があてられているが、明代に描かれた同書の附図が掲載されていないので詳細

は不明である。雲南地方では明代の初期あるいはそれ以前から *Inula* 属植物基源の威靈仙が使用されていたのかも知れないが、現代に至るまで、他の地方でこのものが使用された形跡はなく、地方的なものであろう。

IV. 清代の「威靈仙」

『花鏡』³⁰⁾ に「鐵線蓮一名番蓮或云即威靈仙」と記されているように、清代初期にはまだテッセン節植物も使用されていたようである。ただ『植物名実図考』の威靈仙の図 (Fig. 1) は明らかに *Clematis* 属植物であり、その花や葉の形状は *C. terniflora* に酷似している。このことから、清代の後半には威靈仙として *C. terniflora* が定着し、薬用に供されていたようだ。

一方わが国では『図解本草』³¹⁾ に「今唐ヨリ渡ル者ハ色黒シ是ヲ正トナシテ用ユ可キ也」と記され、また岡本一抱³²⁾ は「和人ハ徐長卿及仙人草ヲ以テ威靈仙トス」と述べている。仙人草は *C. terniflora* の変種でわが国に分布する var. *robusta* (CARR.) TAMURA^{11a)} センニンソウであると考えられ、根が黒かっ色であることから³³⁾、17世紀後半にわが国へ輸入されていた威靈仙は根が黒色系の *C. terniflora* 基源であったことがわかる。このことから清代初期においても *C. terniflora* 基源の威靈仙が主流であったと推察できる。ところで、テッセンの生植物がわが国へ輸入されたのは記録上は1661年とされるが³⁴⁾、それより以前、桃山時代にすでに観賞用に栽培されていた³⁵⁾。江戸時代の中頃には広く栽培され、しばしば威靈仙として用いられており、松岡玄達³⁶⁾は「王蘷臣群芳譜ヲ按スルニ和ノ鐵線蓮ト云蔓草ノ根是亦威靈仙ノ一種ナリ若乏漢種時代用」と記している。ただ小野蘭山³⁷⁾が「藥舗ニ唐ノカモジデト呼フ者色黒クシテ長ク数百條一窠ヲナスコレ真ノ鐵脚威靈仙ナリ鐵線蓮ノ根ハ形同ニシテ脆シテ折レ易ク内ニ小白心アリテ舶來ニ同シ代用スペシ」とテッセンをあくまで代用品としていることから、18~19世紀の中国にはテッセン節植物基源の威靈仙はなかったものと考えられる。なお『植物名実図考』では、テッセン節植物は「鐵線蓮」および「轉子蓮」として収載されている³⁸⁾ (Fig. 1)。

一方、謝⁴⁾によれば、故宮博物院に保存されている清代御薬房中の威靈仙はユリ科の *Smilax sieboldii* MIQ. ヤマカシュウの根であるとされ、清代になって本属植物が威靈仙として使用され始めたようで、現在市場にもこのものが認められる³⁹⁾。 *Smilax* 属植物とくにヤマカシュウが使用されるようになった原因是、『湯液本草』¹³⁾ や『本草綱目』¹⁵⁾ で記された「鉄脚」の文字から受ける黒くて堅い印象、『本草綱目』で蔓草類に分類されたこと、『図經本草』³⁾ に記された「実青」の一文などによるものと考えられる。

また近年入手し得た昆明市場の威靈仙は、その内部形態から明らかにキク亜科植物であり⁴⁰⁾、謝⁴⁾は当地では *Inula* 属以外にも *Ainsliaea* 属植物を利用していると記しており、雲南省に限ってキク科植物基源の威靈仙が継続して使用されてきたようである。これらは清代あるいは明代から使用してきたと考えられる。

V. 日本における「威靈仙」

わが国へ威靈仙がもたらされたのはおそらく12世紀の初期に中国から『太平惠民和剤局方』が導入された時期と同じ頃で、以後は主として輸入品を使用し、前報で述べたごとくガガイモ科の *Cynanchum atratum* BUNGE フナバラソウの根を間違いと気づきながらも代用していた¹⁾。桃山時代に *Clematis florida* テッセンの生植物が渡日し、前述のごとく江戸時代にはしばしば威靈仙として利用していた。一方、中国から輸入される威靈仙は中国の南宋から明代、すなわち鎌倉から室町時代にかけての頃に、テッセン節植物基源の淡色系のものから、*C. terniflora* 基源の黒色系のものに変わったため、わが国でも根が黒かっ色の *C. terniflora* DC. var. *robusta* (CARR.) TAMURA センニンソウが使用されるようになった。センニンソウがいつ頃から使用され始めたかは定かでないが、『和語本草綱目』³²⁾ 以前の本草書には「仙人草」の名がみられないことから、おそらく江戸時代になってからのことと思われる。しかし岡本一抱³²⁾が「惟タ唐ヲ用ヒテ宜トス」と述べ、小野蘭山³⁷⁾も「和ノカモジデト呼ブ者ハ大蓼（センニンソウ）根ナリ色黒クシテ微褐折レバ内ニ大白心アリテ味辛シテ下品ナリ」と述べているように、江戸時代においてもやはり中国からの輸入品が賞用されていた。これは根や木部が *C. terniflora* よりは var. *robusta* の方がやや太いこと^{12,33)} で形状を異にしていたからであろう。また『図解本草』³⁰⁾ には倭産としてサクラソウ科の *Lysimachia clethroides* DUBY オカトラノオに似た図が描かれ (Fig. 1)，文中には「倭ハ乾シテ黒カラズ但シ土地ニ依ルカ軟倭ノ威靈仙モ苗ヲ見テ氣味共ニ時珍ガ説ノ如クナラバ色黒カラズトモ用ユ可キカ」と記され、その植物形態が『図經本草』の図に類似していることを理由に、このものが一時的に使用されたようである。しかし、*Lysimachia* 属植物基源を思わせるものは本書以外になく、一過性のものであったと考えられる。また『和名集並異名製剤記』⁴¹⁾ に「一名は能消うつほ草のねなり」と記されているが、ここでいう「うつほ草」はその植物の形状から察して、シソ科の *Prunella* 属植物のことではなく、威靈仙の別名「能消」に充てられた一和名と解釈するのが適当であろう。能消の名は『開宝本草』³⁾ に見られ、『薬品手引草』⁴²⁾ に『能消くがい草』とあるように、日本では一般に *Veronicastrum sibiricum* にあてられていたもの

であり、その花穂の形状から、別名として「うつほ草」と呼ばれていたのであろう。

結論

1. 8世紀頃に朝鮮半島から中国へ伝えられた威靈仙はキンポウゲ科のテッセン節植物であったが、資源的に乏しかったために種々の代用品が生まれた。それらはゴマノハグサ科の *Veronicastrum sibiricum* (L.) PENNELL クガイソウ、セリ科の *Ligusticum* 属 (?) 植物、キク科の *Eupatorium* 属植物、*Inula* 属植物、*Ainsliaea* 属植物、ユリ科の *Smilax* 属植物、センリョウ科の *Chloranthus* 属植物などであった。これら代用品はすべてごく限られた地域あるいは期間に使用されたもので、主流は *Clematis* 属植物基源のものであった。このことはわが国へ輸入された威靈仙がすべて *Clematis* 属植物であったと考えられることからも裏付けされる。ただし *Clematis* 属植物といえども南宋の頃に当初のテッセン節植物から *C. terniflora* へと基源植物が変化し、さらに地方的に多くの同属植物の根が使用されるようになったと考察しうる。

2. 現在中国では黄河以北の地で *Smilax* 属植物基源の威靈仙が多用されているが^{4,39)}、これは清代になって北京近郊で *Smilax* 属植物が使用されるようになり、以後周辺地区へ波及していった結果と考えられる。ただし中國東北部では現在でも *Clematis* 属植物基源の威靈仙が使用されており⁴³⁾、これはおそらく朝鮮半島からの直接の影響であろう。

引用文献および注

- 1) 第6報：御影雅幸、難波恒雄、生薬、37, 351(1983).
- 2) 日本薬学会第100年会（東京、1980年4月）にて発表の一部.
- 3) 唐慎微撰、『經史証類備急本草』; a) 艾晟増訂、『經史証類大觀本草』、柯氏重校影印本、1904、卷12、6丁; b) 曹孝忠等奉勅撰、『政和新修經史証類備用本草』、晦明軒重輯刊本、人民衛生出版社影印、北京、1957, p. 263;
- c) 王繼先等奉勅撰、『紹興校定經史証類備急本草』、龍谷大学図書館蔵本、春陽堂影印、東京、1971、12巻、上.
- 4) 謝宗万編著、『中藥材品種論述』、上冊、上海科學技術出版社、上海、1964, p. 91.
- 5) 著者らが行った現地調査では、湿地に生育する種 (*Clematis patens*, *C. fusca* TURCZ., *C. ianthina* KOEHNE など) は生育地が限られることに加えて、生育地においても個体数が少なく、生薬資源として利用するには不適当なものであった.
- 6) 王懷隱等編、『太平聖惠方』、人民衛生出版社、北京、1958.
- 7) 『聖濟綱錄』、人民衛生出版社、北京、1962.
- 8) 吳其濬、『植物名實圖考長編』、商務印書館、北京、1959, p. 599.
- 9) 難波恒雄、『原色和漢藥圖鑑』、保育社、大阪、1980; 藻本：(上), p. 177; 蘭草：(下), p. 32.
- 10) 御影雅幸、難波恒雄、生薬、37, 342(1983).
- 11) a) M. Tamura, "Systema Clematidis Asiae Orientalis," Scientific Reports, No. 4, Osaka University, Osaka, 1955, p. 43; b) 中国科学院中国植物志編集委員会、『中国植物志』、第28巻、科学出版社、北京、1980, p. 199.
- 12) M. Mikage, T. Namba, *Shoyakugaku Zasshi*, 37, 325 (1983).
- 13) 王好古撰、『湯液本草』; 王肯堂輯、『醫統正脈全書』、第12冊、新文豐出版、台北、1975, p. 7867.
- 14) 陳承等編、『太平惠民和剤局方』、商務印書館香港分館、香港、1971; 「神応円」: p. 142.
- 15) 李時珍、『本草綱目』; a)『本草綱目』、校点小組校点本、第二冊、人民衛生出版社、北京、1977, p. 49, 1307; b)『本草綱目附図』、上巻、金陵胡承竜刊本、国立公文書館内閣文庫蔵版本、春陽堂影印、東京、1979, p. 109; c)『本草綱目附図』、下巻、合肥張紹棠刊本、東京大学附属図書館蔵版本、春陽堂影印、東京、1979, p. 122; d) 木村康一等新註考定、『新註校定國訳本草綱目』、第6冊、春陽堂、東京、1974, p. 336.
- 16) 諸橋轍次、『大漢和辞典』、巻11、大修館、東京、1968; 「鐵」: p. 12178; 「鐵腳梨」: p. 12180.
- 17) 「木瓜」の異名である「鐵腳梨」は脚疾に効があるからだとされている¹⁶⁾.
- 18) 朱橚撰、『救荒本草』、明嘉靖四年刊本、中華書局上海編輯所編輯本、中華書局、北京、1959、巻上、10丁.
- 19) 李ら²⁰⁾も『救荒本草』の附図は *Eupatorium* 属植物によく似ている旨を記しているが、その根拠や考察は述べられていない.
- 20) 李家実、肖培根、樓之岑、薬学学報、15(5), 288(1980).
- 21) 鮑山、『野菜博録』、新学会社蔵版本、古亭書屋影印、台北、1969, p. 120.

- 22) 中国科学院北京植物研究所主編,『中国高等植物図鑑』,第4冊,科学出版社,北京,1975,p.409.
- 23) 歴史上の地名は臧勵龢等編,『中国古今地名大辞典』,商務印書館,1933によった.
- 24) 李中立,『本草原始』; a) 光緒間善成堂刊本,1875~1908,卷3,18丁; b) 掃葉山房藏版,1879,卷3,53丁.
- 25) 倪朱謨,『本草彙言』,大成斎藏版,1645,卷之6圖,2丁.
- 26) 宮下三郎,「本草の図について」,『本草綱目附図』^{15b)},p.9.
- 27) 吳其濬,『植物名実図考』,商務印書館,上海,1957,p.491.
- 28) M. Mikage, T. Namba, *Shoyakugaku Zasshi*, 37, 317(1983).
- 29) 蘭茂原著,滇南本草整理組整理,『滇南本草』,第1卷,雲南人民出版社,昆明,1959,p.384.
- 30) 陳淏子輯,『花鏡』,中華書局,北京,1956,p.112.
- 31) 下津元知原著,難波恒雄編集,『図解本草』,1681年刊本,大阪漢方医学研究所影印,箕面,1981,p.5.
- 32) 岡本一抱,『和語本草綱目』,1698年刊本,春陽堂影印,東京,1965,上冊,p.489.
- 33) T. Namba, M. Mikage, *Shoyakugaku Zasshi*, 37, 307(1983).
- 34) 白井光太郎,『日本博物学年表』,大岡山書店,東京,1934,p.68.
- 35) 塚本洋太郎,週刊朝日百科『世界の植物』,68,朝日新聞社,東京,1977,p.1614.
- 36) 松岡玄達原著,難波恒雄編集,『用薬須知』,漢方文献刊行会,大阪,1972,p.216.
- 37) 小野蘭山口授,小野蕙畠錄,杉本つとむ編,『本草綱目啓蒙』,早稻田大学出版部,東京,1974,p.273.
- 38) 花の形状からみると、頂生し小苞のない「鐵線蓮」はカザグルマ亜節(Subsect. *Patentes*)^{11a)}に属するもので、腋生のようで花の下に2枚の小苞が描かれている「轉子蓮」はテッセン亜節(Subsect. *floridae*)^{11a)}に属する植物である。ただ「鐵線蓮」の葉の形状は *C. florida* に類似し、花は八重咲きの *C. florida* var. *plena*^{11b)} に酷似している。しかし葉は対生しておらず不完全な絵である。「轉子蓮」は *C. courtoisii*^{11b)} によく似ている。
- 39) 日本薬学会第98年会(1978年4月,岡山)にて発表,投稿準備中.
- 40) 未発表.
- 41) 曲直瀬玄朔,『和名集并異名製剤記』,巻上,山本五兵衛板,1623,1丁.
- 42) 加地井高茂編,『薬品手引草』,1843年再刊本,上ノ一.
- 43) 御影雅幸,難波恒雄,生薬,37,334(1983).